

定する必要があるのではないか。このアンケートがその一つになればと思う。

■萩本 稔

“ズレ”が意識されたことを講演者3名とも強調しておられる。その“ズレ”を埋める具体的方策が出てこないのは、ポイントを欠くのではないのでしょうか。学者、研究者、学会の方々は、“生活者”が理解できる言葉で、直接、根気よく呼びかけてください。マスコミ、自治体、公共団体、学校、公開講座を利用するなどして。

討論で問題提起された“ズレ”を埋める方策を主として論ずるべきが、ほとんどなかったという印象で残念だった。日本史研究会としてこれからどうするんだ、という視点が主題となるべきだが、それが無いのは背景を欠く会合だったと思います。不満足です。“ズレ”を埋めるには、このような会合に一般生活者の参加を求めるべきです。一般生活者の聴講に1500円要求することがそもそも“ズレ”ていると思います。

■福島幸宏（京都府立大学大学院）

研究者と住民の意識のずれの問題については議論が深まらず残念でした。もし研究者側に大きな責任があるとすれば、各地の歴史民俗資料館の展示の方法に問題があるのではないのでしょうか。文書を中心とした地域の特質がうまく展示しきれない様に感じられるのですが。

■古川武志（佛教大学）

保存ということについて、我々研究者にとっての目的としては、公開のための保存ということになると思う（大国氏の議論の中の言葉を借りれば、「現地利用主義」も含めて）。つまり、歴史研究の為の保存ということになると思う。しかし、全ての保存をそれで考えてよいかという事、つまり公開という点についての議論もあってよかったのではないだろうか。

■外池 昇（調布学園女子短大）

「救出に際して将来の研究利用や公的機関への寄託等の条件を一切付さない」（藤田氏のプリントより）という姿勢を貫かれたことが、史料ネットの活動が広く理解され、支持された基礎となったのではないかと考えました。また「市寄託をやめ、地域の寺院に文書館を設立する構想」（大国氏プリントより）があるというお話でしたが、これも是非実現するように祈っております。但し、本日のご報告を伺っておりますと、もっともっと具体的な事例を聞かせて頂きたか

ったという感想をもってしまいます。史料ネットの活動途中での、史料救出に際しての組織面・経済面・技術面・法律面等の具体的課題を、生に近い形で示して頂きたかったと思います。どの地域に生活していても、いずれ史料救出は真正面から取り組まなければならないのです。そのための備えのために、史料ネットの皆さんの活動を継続して注目したいと存じております。

■保立道久（東大史料編纂所）

新しい問題に取り組まれ、本当に大変だったのではないかというのが感想です。藤田報告にあった運動の諸原則、特に「自治体を飛び越した活動はしない」という原則が、印象的でした。史料の救出という条件の中では、自治体批判をすることは極めて限定することになると思います。行政批判をせざるを得ない条件の運動が多くならざるを得ない日本の社会の中で、必要でかつ画期的なスタイルのものだったと思います。

大国さんの文書保存運動のサーヴェイを興味深く思いました。アーキビスト運動と近世・近代・現代の学界の関係は、中世からみると不審に思える部分があります。これはおそらく、とりまく条件が困難にしているのだろうと思いますが、状況を整理することは重要と思います。

■堀 純一郎（田辺市史編さん室）

毎日の活動は大変だろうなあ、と考え、敬服しています。ただ、現実にはどのような日常活動が行われているのかという点については、「史料ネットNEWS LETTER」やシンポ記録集、今回の報告等で見聞きさせて頂いているのですが、今一つピンときていない部分があります。どんなところが、と尋ねられても、本人自身未だよく分かっていないので困るのですが、一番大きいのは、史料所蔵者のプライバシーと関わる部分ではないかと考えています。無いものねだりかもしれませんが、申し訳ありませんが、更に広報活動を続けられることをお願いいたします。

地域密着主義は素晴らしいことだし、重要と思われるだが、地域に保存されている史料が、その地域と密接に関係しているものばかりとは限らない。人とモノとしての歴史資料＝文献は移動するもので、現実には人に密着した形で他の地域に移動してしまった史料も存在する。もとより離れてしまっただけは無価値になる、というような極論ではないと思うのだが、視野に入れておいて欲しいと思う。